

イギリス・アイルランドにおける映画関連機関について^{*1}

Film Organizations in UK and Ireland

- 深谷公宣／富山大学芸術文化学部
FUKAYA Kiminori / University of Toyama Faculty of Art and Design
- Key Words: BFI, UK Film Council, Scottish Screen, Northern Irish Screen, IFI, IFB

要旨

本稿のねらいはイギリス (United Kingdom) ・アイルランド (Republic of Ireland) における映画支援事業の全体像を把握することである。日本ではあまり言及されないことのないスコットランドとアイルランドの映画に関する産業・文化振興についても取り扱っている。

イギリスは周知のとおり、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの4つの地域から成り立っている。これらの地域は、映画に関してそれぞれ独自の文化を形成している。1949年に独立国家となったアイルランドでも、固有の映画・映像文化を発展させている。そうした文化が、それぞれの地域・国家でどのように支援されているのか。本稿では特に映画関連の支援機関について紹介しながら、各地域の事情を概観する。

1 イングランドの映画関連機関

イギリスにおける最初の本格的な映画上映は1896年、ロンドンで行われた。その後ロンドン近郊のブライトンで映像技師たちが様々な作品を製作し始めて以来、イングランドは長らくイギリス映画産業の中心であり続けている。

イギリス映画・映像事業を包括的に取り扱う機関もまたイングランド、ロンドンを拠点にしている。「英国映画協会」(British Film Institute, 以下BFI) と「UKフィルム・カウンシル」(UK Film Council, 以下UKFC) である。これらは日本でもよく知られているが、ここでは *The Encyclopedia of British Film* (85, 220)^{*2} と公式サイト *BFI*, *UKFC* を参考にしながら、改めてその設置形態と事業内容について整理しておきたい。

1.1 英国映画協会

設置形態と事業内容

BFIは1933年、国家による資金援助をもとに設立された。設立当初の設置形態は私企業 (private company) であったが、1983年からは国王特許状 (Royal Charter) によって認可される公益団体というかたちをとっている。

設立当初想定された主な事業は、教育研究目的で利用

される映像の提供と、そのための映像収集・保存であった。設立の2年後、1935年には早くも「ナショナル・フィルム・ライブラリー」(National Film Library) が作られている。これは現在、「BFIナショナル・アーカイヴ」(BFI National Archive) という名前に変わっているが、映像資料のアーカイヴとしては世界最大級の規模を誇る。

BFIの現在の事業目的は次のようなものである。“The BFI (British Film Institute) promotes understanding and appreciation of Britain's rich film and television heritage and culture.” (“What We Do” *BFI*) (「映画やテレビなどの映像に関する遺産・文化への理解・評価を高めること。’) 映像の理解と評価には「教育」と「保存」が重要な役目を果たす。この2つの事業は設立以来今日までBFIの軸を成すものであり続けている。

教育事業

BFIは『BFI スクリーン・オンライン』(*BFI Screen Online*) というウェブ・サイトを通し、イギリス国内の教育・研究者や学生がBFIナショナル・アーカイヴに保存されている映像クリップを無料で利用することを許可している (登録制)。

そうした利用の便をはかるため、このウェブ・サイトには“Education”という教育専用のページが設けてある。そのページを訪れば、教員は授業のスパイスや“Show and Tell”の題材等のために用意された映像を利用することができる。(“Education” *BFI Screen Online*)

日本では昨今、文化庁が行ってきた『『日本映画・映像』振興プラン』において、BFIの教育事業が参考にされている。たとえば、平成14年度に当時の文化庁長官(河合隼雄)の裁定により設置された「映画振興に関する懇談会」(高野悦子座長)の議事要旨(第12回)には、「イギリスのBFI (British Film Institute: 英国映画協会) では小学校から映像の作成の授業を取り入れている。映画のできるまでを分かりやすく教えていけば、映画というものが美術や音楽よりも、積極的に意味のあるものであることが理解できると感じる」との記録がある。(「映画振興に関する懇談会(第12回) 議事要旨」『文化庁』)



写真1 ロンドン・サウスバンク地区にある複合映画施設「BFI サウスバンク」(著者撮影)

この記録が示唆するように、(映像制作・映像リテラシーのどちらに関しても)日本の場合イギリスと比べ「教育」の視点が非常に弱い。たとえば、映画もその一部に含まれるメディア産業の振興に関し、日本で国策として構想された「国立メディア芸術総合センター(仮称)」の設置は平成21年度の政権交代により撤回(予算執行停止)されたが、この構想案でも、産業振興を重視するあまり人材育成が疎かにされている印象があった。あくまでも印象論だが、《教育に関しては現場の仕事であり国の関与するところではない》との認識が、いまだ支配的なのではないか。そうした認識がもしあるとすれば、それは今後の文化行政において改めていくべきだろう。その際、BFIを初めとするイギリスの映画関連機関の教育事業はある程度まで参考になる。

保存事業——アーカイヴとアクセス

一般に、教育用の映像利用を円滑に進めるためには、保存事業を充実させ、映像アクセスの自由度を高める必要があるが、世界最大級の規模を誇るBFIのナショナル・アーカイヴには劇映画が50000本以上、ノンフィクション映画が100000本以上、テレビ番組が625000点ほど収蔵されているという(2007年時)。(“BFI National Archive” BFI)

前述のとおり、アーカイヴへのアクセスは教育利用が主であるが、イギリスの学校教育機関に所属していない一般市民でも、地域の図書館などからアクセスし、映像クリップを見ることが可能である。

また、複合映画施設「BFIサウスバンク」(BFI Southbank、前・国立フィルム・シアター[National Film Theatre])には「BFI メディアテーク」(BFI Mediatheque)という設備が設けられており、一部のデジタル化されたアーカイヴ映像を無料で視聴することができる。

受付で氏名と利用時間を申告すると利用ブースを指示されるので、そこへ行って好きな映像を観る。実際に2時間ほど利用してみたが、平日の昼間という時間帯に、約20台ほどのブースの半数が埋まるほどの利用者があった。

映像以外の保存資料に関しては、ロンドンの地下鉄トテナム・コート・ロード駅近くに「BFI ナショナル・ライブラリー」(BFI National Library)という専用の図書館がある。こちらは会員制で、有料となっている。実際に利用してみたところ、映画・テレビ研究を専門とする学生らしき若い人々の姿が多くあった。



写真2 BFI サウスバンク内にある映像視聴施設「メディアテーク」(著者撮影)

1.2 UK フィルム・カウンシル

設置形態と事業内容

UKFCは、2000年、映画産業の振興と映像文化の発展を目的として設立された機関である。設置形態は、非省庁公的機関(non-departmental public body)である。非省庁公的機関とは、“government organisations that are not part of any department. This means they operate at an arm's length from ministers” (“Departments, agencies and NDPBs” UK Civil Service) すなわち、中央政府の作業過程において役割を演じるが、政府の省庁でもその一部でもなく、大臣とはある程度一定の距離を置いて運営される機関である。後述するスコットランドの映画機関などもこれに相当する。

UKFCの主な事業は映画製作や映画関連団体への公的助成である。

UKFCには毎年、政府と「ナショナル・ロタリー」(National Lottery)の基金から資金が提供されており、それが映画製作やシナリオ作成、映画教育、映画祭等への助成金として配分される仕組みになっている。映画関連の公的助成は以前、芸術支援機関である「アーツ・カウンシル・オブ・イングランド」(Arts Council

of England) のロツタリー映画部門が行っていたが、2000年以降はUKFCがそれを引き継いでいる。

言い換えれば、UKFCは、公的資金を映画産業界へと流すパイプ役である。なお、前出のBFIも、後述するイギリス各地域の映画機関とともに、UKFCとロツタリー基金による資金援助を受けている。

事業内容への批判

しかしながら、公的資金の映画産業界への投入には賛否がある。

たとえば、独立系の映画作家アレックス・コックス (Alex Cox) は、UKFCがロンドン中心に機能しており、地域で活動する作家への支援を行っていないことや、その一方で、ハリウッドをベースに活動する人員が役員職に配置され、ハリウッド映画の製作資金までUKFCから提供できるように試みている点などを厳しく批判している。また、ケン・ローチ (Ken Loach) やティルダ・スウィントン (Tilda Swinton) ら、商業的な成功よりも芸術文化的な達成を主眼とする「アート・シネマ」(Art Cinema) のジャンルで活躍してきた映画監督や俳優も、同様の主旨の批判を行っている。(Casey Benyahia 24)

商業的な成功を二次とする独立系、アート・シネマ系の映画人は大手の映画会社からの資本提供が望めないため、公的助成は重要な資金源である。しかしUKFCが、彼らのような少数派ではなくハリウッドも含めた商業映画への支援を重視するならば、彼らの側から批判が起ってくるのも無理はない。

とはいえ、UKFCが資金提供した作品には、『ベッカムに恋して』(Bend It Like Beckham, 2002) のように商業的に成功したもの以外にも、ヴェネチア映画祭金獅子賞を受賞した『マグダレンの祈り』(Magdalene Sisters, 2002) など作品自体に高い評価を与えられたものがあり、公的助成が産業面だけでなく文化的な面で貢献している例が見られるのも事実である。(Ibid 26) そうした産業促進と文化的発展のバランスを取ることが重要であろう。

事業運営面において、両者のバランスはどのようになっているだろうか。公式サイトにおける“strategy”のページには「イギリス映画を国際的に競争力のあるものにする」「イギリスにおける観客の関心を刺激する」など、産業的な側面を強調する戦略が立てられているが、反面、“policy priorities”のページに“media literacy”の項目があり、“funding priorities”としてデジタル・アーカイブ支援事業への予算100万ポンドが計上されるなど、「教育」「保存」の2大事業に代表される文化的側面も決して疎かにされているわけではない。(“About

Strategy” UKFC)

後者についてはBFIの事業目的とも合致しており、批判すべき点はないだろう。資金の配分方法を痛烈に批判したコックスも、UKFCの存在意義そのものは認めている。肝心なのは、公的資金が上記のような事業に向けて具体的にどう利用されるかである。

1.3 今後の展開

イギリス全体の映画支援事業を行う組織として、文化面(教育・保存)においてはBFIが、産業面(資金提供)においてはUKFCが、それぞれの役割を果たしているが、2009年8月、イギリス文化メディアスポーツ大臣シオン・サイモン (Siôn Simon) が、この2つの機関の合併を勧告し、波紋を呼んでいる。(“Merger proposed for flagship film bodies” UKFC)

イギリス・アイルランドにおいてはここ数十年、映画・映像事業をめぐる関連機関の再編がかまびすしいが、この合併を求める勧告などは象徴的といえよう。

スコットランドでも類似の動きがあるが、それについては後述する。

2 スコットランドの映画関連機関と映画祭

2.1 スコティッシュ・スクリーン

前述したとおり、イギリスの映画製作はイングランド中心に行われてきた。そのため、イギリス映画を包括的に扱うBFIやUKFCのような機関もまたイングランドに拠点を持つこととなった。

しかし一方で、スコットランドと、1949年に独立国家となったアイルランド共和国でも1970年代から1980年代にかけて、映画産業の支援体制が整い始めた。

スコットランドの映画を産業面・文化面から支える機関に「スコティッシュ・スクリーン」(Scottish Screen、以下SS)がある。これは、1970年代終わりごろから設立が続いたスコットランドの各種映画機関を統合し、1997年に設立された新しい機関である。

以下、設立に到るまでの歴史的経緯を、Duncan Petrie 著 *Screening Scotland* と公式サイト *Scottish Screen* を参考に、簡単に振り返っておく。

設立までの経緯

1970年代、イギリスでは労働党政権により「権限委譲」(devolution)による地方分権化が構想され、79年にはスコットランドとウェールズでその是非を問う住民投票が行われた。しかし、賛成票の割合が規定の数字に届かず、分権化は日の目を見ずに終わった。

この分権化構想の背後には特にスコットランドにおける民族意識の高まりがあったが、スコットランド独自の

映画産業支援体制が整い始めるのはそうした時期と重なる。1979年、「スコットランド・フィルム・カウンシル」(the Scottish Film Council、以下、SFC)は「スコットランド・アーツ・カウンシル」(the Scottish Arts Council)の協力を得て、5000ポンドの映画製作資金を充当した。このことをきっかけに、1982年、「スコットランド映画製作基金」(the Scottish Film Production Fund、以下、SFPF)が設立される。また、1993年には、グラスゴーやその周辺での映画製作を奨励するために「グラスゴー映画基金」(the Glasgow Film Fund、以下、GFF)が作られ、資金提供を開始。(Petrie 173-176)ダニー・ボイル(Danny Boyle)の『シャロウ・グレイヴ』(*Shallow Grave*, 1995)やケン・ローチの『カルラの歌』(*Carla's Song*, 1997)、『マイ・ネーム・イズ・ジョー』(*My Name is Joe*, 1998)など、グラスゴーを舞台とする著名な映画が、GFFの資金を利用して生まれることとなった。

スティーヴ・ブランドフォード(Steve Blandford)はPetrieに依拠しながら、1990年代半ばのスコットランド映画ブームの根幹に、権限委譲と、上記のような映画産業支援体制の整備があったことを次のように指摘している。

For Petrie, ... this boom has clear foundations in a number of strategic decisions made by those in a position to secure investment in Scottish film production. These include the expansion of the Scottish Film Production Fund, the introduction by the City Council of the Glasgow Film Fund and the establishment of Scottish Screen which now administers both Lottery funds and the Film Production Fund itself (Petrie 2000: 173-80). In British terms this represented a genuinely concerted effort to establish a production base in Scotland that was clearly linked to a wider devolutionary impulse. (Blandford 65)

このように、スコットランドを舞台とする映画製作の隆盛は、権限委譲という政治的な動きやそれに付随するナショナリズム的な思惑と結びついていた。その意味で、SFCとSFPFほか既存のアーカイヴ組織等が統合されてSSが誕生した1997年が権限委譲実現の年であったことは象徴的である。

事業内容

BFIやUKFCが教育事業を柱としていたのと同様、SSもまた、映像リテラシー教育を重要なものと位置づけている。たとえば2004年にSSは、“MIE”(Moving

Image Education)という学校教育における映像リテラシーのためのパイロット・プログラムを開始。Create, Explore, Analyseの三本柱(理念的にはそれぞれがCreative, Cultural, Criticalに対応するものと捉えられ、SSではこれを3Cと呼んでいる)を軸にした教育を行い成果を上げている。

映像教育のためのアーカイヴ利用、という点でもSSは積極的である。SSは独自にアーカイヴ(the Scottish Screen Archive)を所有しているが、2008年度、そのアーカイヴと「ナショナル・ライブラリー・オブ・スコットランド」(the National Library of Scotland)、学校教育カリキュラム向上のための非省庁公的機関「スコットランド学習・教育」(Learning and Teaching Scotland)が協力し、「スコットランド・オン・スクリーン」(Scotland on Screen)なるパイロット・プロジェクトを実施。映像リテラシー教育における包括的・持続的な映像利用を目指して活動を続けている。(“Moving Image Education in Scotland” *Scottish Screen*)

一方、SSは映画産業全体の改善も主眼に置いている。公式サイトには「製作会社の育成」や「短編・長編映画の開発と製作」「観客、市場の開発と配給の主導」など、映画産業を活性化するための仕事が掲げられている。(“About Us” *Scottish Screen*)

今後の展開

1997年に実現した権限委譲により、スコットランドは独自のネーションとして今まで以上に結束し、発展していかなければならなくなった。映画産業の活性化は、イギリス映画の一部門ではなく独立した「スコットランド映画」をひとつの領域として確立することで、ネーションの結束・発展の象徴となる可能性を秘めている。

スコットランド議会は2008年3月、現在のSSとスコットランド・アーツ・カウンシルを統廃合し、新たな芸術発展のための機関として「クリエイティヴ・スコットランド」(Creative Scotland)を設立する法案を提出。2010年には設立が実現する予定である。(“Creative Scotland” *Scottish Screen*)

イングランドではBFIとUKFCの合併を求める声が出ているが、スコットランドでは既に政府が機関の統合を進めている。こうした状況には、権限委譲によるネーションの結束を文化産業が後押しせねばならないという発想が垣間見える。

2.2 スコットランドの映画祭

映画・映像文化発展のための事業として、映画関連機関の充実とともに映画祭の主催がある。スコットランドでもそうした事業が行われているが、ここでは歴史のあ

る映画祭と——現地取材の報告も兼ね——新興の映画祭について、ひとつずつ概観してみたい。

2.2.1 エディンバラ国際映画祭

スコットランドには世界的に有名な「エディンバラ国際芸術祭」(Edinburgh International Festival)があるが、「エディンバラ国際映画祭」(Edinburgh International Film Festival、以下、EIFF)は芸術祭が誕生したのと同じ1947年、それと平行するようなかたちで始まった。

EIFFは当初、イギリスにおけるドキュメンタリー映画運動を広く一般に知らしめることを目的としたものであった。

ドキュメンタリー映画運動は1930年代にスコットランド出身のジョン・グリアスン(John Grierson)が主導した運動である。エディンバラには早くから「フィルム・ギルド」(the Edinburgh Film Guild)という映画上映団体があり、映画鑑賞の機会を提供するとともに、このギルドの活動の中から『シネマ・クォーターリー』(Cinema Quaterly)という雑誌が生まれ、ドキュメンタリー運動に関わったポール・ローサ(Paul Rotha)やバジル・ライト(Basil Wright)が寄稿するなど、運動の批評基盤を形成していた。EIFFの立ち上げに尽力したのは、この雑誌の編集者だったノーマン・ウィルソン(Norman Wilson)とフォーサイス・ハーディ(Forsyth Hardy)である。そうしたことから、ドキュメンタリー運動がEIFFの主要なプログラムに据えられたのは自然な流れであった。第1回のEIFFでは、フィルム・ギルドによってドキュメンタリー映画が上映された。(Petrie 110)

その後、映画祭の認知度が高まるにつれて海外の劇映画の紹介や回顧上映などの企画が行われるようになっていく。1970年代にはドイツ映画の新しい潮流やアメリカの独立系の作家たちの作品、さらには日本の巨匠たちの作品などが特集上映された。近年は新たな才能を発掘するためのプログラムにも力を入れている。("History" *Edinburgh International Film Festival*)

2.2.2 グラスゴー映画祭

グラスゴーは、過去に何度も映画の舞台になってきた。1930年代、1940年代には盛んだった造船業をモチーフにした映画がいくつか作られている。(Petrie 79-87)

前述のとおり、1993年にはGFFのような基金整備も行われるなど、映画産業基盤が充実してきたかにみえるグラスゴーだが、グラスゴー映画祭が始まったのは2005年のことである。

2009年2月に第5回の映画祭が開催されたので、その様子を見にグラスゴーを訪れた。グラスゴーの中心部



写真3 グラスゴー映画祭のメイン会場である「グラスゴー・フィルム・シアター」(著者撮影)

にある映画館やライブハウスなどを会場とし、オードリー・ヘップバーン(Audrey Hepburn)回顧特集などの企画上映が行われていた。

メインとなる映画館、「グラスゴー・フィルム・シアター」(Glasgow Film Theatre)では是枝裕和監督『歩いても、歩いても』が上映ラインナップに名を連ねていたが、筆者はアイルランド映画の『32A』(32A, 2008)を鑑賞した。鑑賞前には映画祭主催者による舞台挨拶が行われた。

平日の午前中だったこと、作品が小品であったことから、鑑賞者の数はそれほど多くはなかったが、期間中(10日間)20000人以上が足を運んだという。("Glasgow Film Festival 2009" *Eye for Film*) 上映作品は100本を越え、規模としては申し分ない。今後の展開が期待される。

3 ウェールズと北アイルランドの映画関連機関

3.1 ウェールズ映画庁

ウェールズの場合、スコットランドとは異なり、地方分権化への意志は比較的穏健だった。けれども、1997年に権限委譲が実現したところスコットランドを舞台にした映画が数多く作られたのと同様に、ウェールズを舞台とする映画もまた立て続けに登場した。『ツイン・タウン』(*Twin Town*, 1997)、『ハウス・オブ・アメリカ』(*House of America*, 1997)などである。

オリエンタリズム的な見方を引き付ける要素はあるものの、ナショナリティを意識させるそうした作品群の登場のおかげで、それまで不安定だったウェールズの映画文化が確立し始めたとも考えられる。

しかし、そのような文化的風土を支える支援基盤は、ウェールズではいまだ安定しているとは言い難い。ウェールズ映画の文化・産業を推進するための機関「ウェールズ映画庁」(Film Agency for Wales、以下、FAW)が設立されたのは、2006年と比較的最近のこと

である。

FAWは、ウェールズ議会や「アーツ・カウンシル・オブ・ウェールズ」(Arts Council of Wales)、UKFCなどの支援を得て、映画製作、公開、教育などの分野に資金提供を行っている。特にウェールズから新しい才能を持った映画人を発掘することに力を注いでいるようだ。(“Film Agency News 18 Nov. 2009” *Film Agency for Wales*)

保存事業については、FAWとは別の機関である「ウェールズ映像音声アーカイヴ」(National Screen and Sound Archive of Wales)が行っている。これは2001年、既存の「ウェールズ映画テレビ・アーカイヴ」(Wales Film and Television Archive)と、「ナショナル・ライブラリー・オブ・ウェールズ」(The National Library of Wales)にあった「音声映像コレクション」を統合するかたちで作られたものである。

このほか、ウェールズには議会が主導する「ウェールズ映画コミッション」(Wales Film Commission)なる組織もあるが、映画映像文化、映画産業の本格的な発展にはもう少し時間がかかりそうである。

3.2 北アイルランド・スクリーン

スコットランドやウェールズと比べ、北アイルランドは政治的・宗教的な紛争対立が続いてきた特異な地域である。

しかし紆余曲折を経ながらも1998年に和平交渉が成立、同年、権限委譲が行われると、そうした情勢の変化と平行するように、この地域の映画支援事業も充実してきた。現在中心となる機関は「北アイルランド・スクリーン」(Northern Ireland Screen、以下、NIS)である。

設立までの経緯

北アイルランドは1930年代に一度映画製作が盛んになり、1940年代にはキャロル・リード(Carol Reed)の『邪魔者は殺せ』(*Odd Man Out*, 1947)によって重要なモチーフにもされたが、その後、映画史上において長らく周縁の位置にあった。

北アイルランドで再び映画製作が盛んになるのは1980年代になってからである。状況好転を受け、1989年には現在のNISの前身「北アイルランド・フィルム・カウンシル」(Northern Ireland Film Council、以下、NIFC)が設立される。

NIFCは1995年からロッタリーの基金を利用し、地域の映画製作、特にショート・フィルムの製作を奨励した。これが北アイルランドの映画映像文化・産業を推し進めるひとつの大きなきっかけになったと、マーティン・マクルーン(Martin McLoone)は指摘する。“The

big breakthrough came when British Lottery money was made available in 1995 and European money in 1997” (McLoone 117) .

NIFCはロッタリーの基金をもとにし、BBC北アイルランド放送局と共同で「ノーザン・ライト」(Northern Light)という支援枠組みを作って資金提供を実行。その資金提供の恩恵を受けた『ダンス・レキシィ・ダンス』(*Dance Lexie Dance*, 1996)は米アカデミー賞短編実写映画賞にノミネートされ、成功を収めた。(The *Encyclopedia of British Film* 490)

NIFCはその後、デジタル化への対応などの理由から2002年に現在のNISとなって再出発し、活動を続けている。

事業内容

NISは北アイルランドにおける映画産業の発展や才能ある映画人の発掘、映像文化の発信を目的としているが、他地域の機関同様「教育」と「保存」にも力を注いでいる。教育に関してはBFIと提携し、映像リテラシー教育のポリシーとしてMIEの推進をうたう「より幅広いリテラシー」(A Wider Literacy)なる文書を公表している。(“A Wider Literacy” *Northern Ireland Screen.*)そうした教育には、デジタル・アーカイヴに保存整理された映像が利用されることになる。

4 アイルランド共和国の映画関連機関

1970年代ごろまで、アイルランド映画はほとんどが外国(主にイギリスとアメリカ)の映画会社によって作られていた。

土着の映画作家が登場するのは1973年、「芸術法」(Arts Act)の修正法が可決して以降である。この修正によって「芸術」のカテゴリーに「映画」が加わり、アーツ・カウンシルの基金が映画にも適用できるようになった。(Kevin et al. 128)

アートカレッジの卒業生やテレビ業界でキャリアを積んだ人々がそうした基金を利用して映画を作り始め、映画作家として育っていったのが1970年代後半である。代表格として、アーツ・カウンシルの第1回映画シナリオ賞(Film Script Award)を獲得したボブ・クイン(Bob Quinn)などが挙げられる。

そうした流れのなか、1980年代になるとアイルランドは文化政策を推進し、1987年にアイルランド初の文化政策白書『アクセスと機会』(*Access and Opportunity*)を発表。この白書が「アイルランド映画センター」(the Irish Film Centre、以下、IFC)と「アイルランド映画委員会」(the Irish Film Board、以下、IFB)の必要性・重要性を説き、映画産業・文化振興の

ための土壌が固められていくことになった。(Kevin et al. 121)

4.1. アイルランド映画協会

「アイルランド映画協会」(the Irish Film Institute、以下、IFI)は、1945年に創設された「アイルランド国民映画協会」(the National Film Institute of Ireland)が前身である。映画は人々の道徳心を育てるために奉仕すべきだという理念のもとで、教育映画を製作・配給・興行することが当初の事業だった。

しかし、時がたつにつれそうした理念がそれほど確固たるものではなくなっていき、1980年代になるとアーツ・カウンシルの支援を受けながら新たな役割が模索されるようになる。その結果、1992年にIFCがオープンし、アーカイヴ(the Irish National Archive)が設立されて再スタートを切った。

その後、IFCが2003年に改名され、現在のIFIとなっている。映像資料の公開により若い観客に広い映画経験を提供する目的の教育部門もあり、他地域同様、「教育」と「保存」が事業の鍵である。また、近年は商業ベースに乗らなかった映画作品の上映を行う一方、アイルランド映画の海外プロモーションなども活動の中心に据えている。

4.2. アイルランド映画委員会

アイルランドには、独立後まもなく、国内初めての映画会社、アードモア・スタジオ(Ardmore Studio)が設立されたが、このスタジオは外国資本を呼び込もうとする傾向が強かったため、土着の映画人の活動の中心とはならなかった。

そこで、そうした土着の映画人の活動を金銭的に支援するIFBの設立の必要性が説かれるようになり、1980年に設立のための法案が可決された。

しかし肝心の委員のメンバーがなかなか決まらないなど、機関の立ち上がりは不安定であった。最初の助成としてニール・ジョーダン(Neil Jordan)の『エンジェル』(*Angel*, 1982)に高額な充当金が提供されると批判も起こった。(Ibid 119)

けれどもその後この委員会の支援で成功する作品も出現し、IFBは存在意義を示していく。最近では『麦の穂をゆらす風』(*The Wind that Shakes the Barley*, 2006)や、『Once ダブリンの街角で』(*Once*, 2007)がこの委員会の支援をあおぎ、成功している。

IFIが「教育」や「保存」を行う機関であるのに対し、IFBは資金援助や、ロケーションへの誘致などを行うフィルム・コミッション的な性格を持つ機関であるといえる。長編映画、テレビ、アニメ、ドキュメンタリー、

ショート・フィルムの企画開発、製作、公開のための資金提供を行うとともに、海外からの映画製作者がアイルランドで映画製作を行うのに必要な情報を包括的に提供する役割などを担っている。

しかしながら、IFBは政府(芸術・スポーツ・観光庁)の下部組織という位置づけになっているため、政府によるコストカットが運営の存続に直接的に影響する面もあるようで、1987年には一度閉鎖されている。1992年に復活し、現在に至るが、2009年夏には政府が芸術に関する経費節減の観点からIFBの経営を再検討すべきだとの勧告を行い、議論を呼んでいる。(Ted Sheehy “Irish Film Board under Threat” *Screen Daily.Com.*)

5. まとめ

イギリスの映画機関について改めて、ごく大雑把にまとめてみると、BFI、SS、FAW、NISの4つが文化・産業支援を具体的に実行している事業支援型の機関。それらの機関の活動を金銭的に補強している助成型の機関がUKFCである。

アイルランドにおいては、事業支援型に相当するのがIFI、助成型に相当するのがIFBであると、ひとまずはいうことができる。

いずれの機関にも共通して言えることは、デジタル時代の到来を踏まえつつ、映像を初めとするメディア・リテラシー教育の開発に力を入れていること、そのためにデジタル・アーカイヴの整備や公開に積極的に取り組んでいることである。

ただし、全体を通してみるとイギリス・アイルランドの映画支援事業は文化・産業の両面で多様な様相を呈しており、変化の過程にあることがわかる。事態は流動的であり、今後も様々なかたちでの展開が予想される。

注釈

- *1 本稿は、学内公募研究費(平成20年度若手研究者支援経費)採択課題「イギリス映画史研究」の成果の一部を「資料」として報告するものである。
- *2 括弧内は頁数を示す。以後、出典については書籍の場合、参照した文献の作者と頁数を、ウェブ・サイトについてはウェブ・ページの見出しとそのページを含むサイト名(加えて、著者の明確なものは著者名)を、それぞれ括弧内に示すものとする。

引用・参考文献

1. “About Strategy” *UKFC*. 7 Dec. 2009 <<http://www.ukfilmcouncil.org.uk/aboutstrategy>>
2. “About Us” *Scottish Screen*. 7 Dec. 2009 <http://www.scottishscreen.com/content/main_page>

- php?page_id=12>
3. "BFI National Archive" *BFI*. 7 Dec 2009 <<http://www.bfi.org.uk/nftva/>>
 4. "Departments, agencies and NDPBs" *UK Civil Service*. 7 Dec 2009 <<http://www.civilservice.gov.uk/about/facts/Departments-NDPBs/index.aspx>>
 5. "Creative Scotland" *Scottish Screen* 7 Dec. 2009 <http://www.scottishscreen.com/content/main_page.php?page_id=32>
 6. "Education" *BFI Screen Online Screen* 7 Dec. 2009<<http://www.screenonline.org.uk/education/index.html>>
 7. *The Encyclopedia of British Film*. Edited by Brian McFarlane. London: Methuen, 2003.
 8. "Film Agency News 18 Nov. 2009" *Film Agency for Wales*. 7 Dec. 2009 <<http://www.filmagencywales.com/index.php>>
 9. "Glasgow Film Festival 2009" *Eye for Film*. 7 Dec. 2009 <<http://www.eyeforfilm.co.uk/festivals/glasgow/>>
 10. "History" *Edinburgh International Film Festival*. 7 Dec. 2009 <<http://www.edfilmfest.org.uk/about-the-festival/history>>
 11. "Merger proposed for flagship film bodies" *UKFC*. 7 Dec. 2009 <<http://www.ukfilmcouncil.org.uk/15851>>
 12. "Moving Image Education in Scotland" *Scottish Screen*. 7 Dec. 2009 <http://www.scottishscreen.com/images/documents/moving%20image_2009.pdf>
 13. "What We Do" *BFI*. 7 Dec 2009 <<http://www.bfi.org.uk/about/whatwedo.html>>
 14. "A Wider Literacy" *Northern Ireland Screen*. 7 Dec. 2009 <<http://www.northernirelandscreen.co.uk/page.asp?id=59>>
 15. Blandford, Steve. *Film, Drama and the Break-Up of Britain*. Bristol: Intellect Books, 2007.
 16. Burton, Ruth. *Irish National Cinema*. London and New York: Routledge, 2004.
 17. Casey Benyahia, Sarah. *Teaching Contemporary British Cinema*. London: BFI, 2005.
 18. McLoone, Martin. *Irish Film: The Emergency of a Contemporary Cinema*. London: British Film Institute, 2006.
 19. Petrie, Duncan. *Screening Scotland*. London: BFI Publishing, 2000.
 20. Rockett, Kevin, Luke Gibbons, John Hill. *Cinema and Ireland*. New York: Syracuse University Press, 1987.
 21. Sheehy, Ted. "Irish Film Board under Threat" 20 July 2009. 7 Dec. 2009 *Screen Daily.Com*. <<http://www.screendaily.com/irish-film-board-under-threat/5003701.article>>
 22. 「映画振興に関する懇談会（第12回）議事要旨」『文化庁』2009年12月7日<http://www.bunka.go.jp/geijutsu_bunka/eiga_eizou/other/eigashinkou_kondankai_giji_12.html>